

存在命題の意味論的分析

— フレーゲ再考 —

A Semantic Analysis of Existential Propositions: On G. Frege

加藤 雅人
Masato Kato

In this paper we analyze the nature of existential propositions, such as (1) Socrates is wise. (2) Socrates is not. (Socrates doesn't exist.) (3) There are no dragons. (Dragons don't exist.) (4) There are tame tigers. (Tame tigers exist.) These propositions are called existential because their predicate seems to attribute some kind of being or existence to the reference(s) of their subject. Is this the case? The answer to this question differs in each case. We, critically reconsidering the argument by G. Frege about the nature of existence, try to analyze what is meant by each proposition above.

There is no disagreement among observers about the proposition (1) above, which attributes the property of wisdom to Socrates. The problem is whether the propositions (2), (3), and (4) attribute the property of existence (or non-existence) to what their subjects refer to. According to Frege's view, existence, like number, is not a property of individual things, but a characteristic of concepts which have some instantiations falling under them. We agree with him about the nature of general existential propositions such as (3) and (4), but disagree about that of singular existential proposition like (2).

キーワード

philosophy of language, semantics, existential propositions, existence, Frege

序

本稿¹⁾で分析の対象とするのは、以下のような be 動詞を含む文、およびそれらの文によって

表現される命題の意味である。

- (1) Socrates is wise.
- (2) Socrates is not. (Socrates doesn't exist.)
- (3) There are no dragons. (Dragons don't exist.)
- (4) There are tame tigers. (Tame tigers exist.)

このうち、(1)&(2)は個体について語られ、単称命題 (singular propositions) と分類される。(3)&(4)は一般的概念について語られ、一般命題 (general propositions) と分類される。

(1)は、述語が表す属性 (property) を主語が指すものに帰属させている。すなわち、'Socrates' によって指示される人物について、'is wise' (または 'wise') によって表される〈賢いこと (being wise)〉または〈知恵 (wisdom)〉という性質が属すると語っている。これは、'be' の叙述用法 (attributive use) である。これに対して、(2)・(3)・(4)の 'is' や 'are' は、'be' の存在用法 (existential use) であり、'exist(s)' への言い換えが可能である。(2)・(3)・(4)の文は、少なくとも表面的には、主語の〈存在 (existence)〉または〈非存在 (non-existence)〉といった性質を表しているという意味で、存在命題 (existential proposition) を表す文である。ところで、言語学には語の意味論はあっても、文の意味を扱う固有の方法論がない。そのため、言語学は文の意味に関する分析を論理学に頼ってきた²⁾。したがって、本稿においては、論理学や言語哲学の理論、主としてフレーゲの説を批判的に再検討することによって、存在命題を表す文の意味論的分析を試みる。

I. 存在は述語ではない

論理学や言語哲学において、存在命題を表す文に関する分析や論争³⁾はこれまで、「存在は述語ではない (Existence is not a predicate.)」という格言を中心に回ってきた。謎めいたこの言葉は何を意味しているのか? ムーアによれば⁴⁾、'Existence is not a predicate.' と言われる時、その文は、ものについて (*about*) ではなく語についての命題を表している。すなわち、'existence' という語が表す〈存在〉というものや性質ではなく、'exist(s)'、または動詞 'to exist' のその他の定形、たとえば 'existed' や 'will exist' のような語についての命題を表す。そしてその文は、そのような語が、文法的な意味 (grammatical sense) において述語でないとやっているわけではない。じっさい、(2)・(3)・(4)における 'exist(s)' は、明らかに文法的には述語である。そうではなく、その文における 'a predicate' は、論理的意味 (logical sense) において使用されている。すなわち、'Existence is not a predicate.' は、'exist(s)'、'existed'、'will exist' などの語は、論理的意味における述語ではないということを意味する。

では、「'exist(s)' が論理的意味における述語ではない」と言うことによって、何が意味されているのか。ニールによれば⁵⁾、「論理的意味における述語」とは、属性 (attribute) を表す。

つまり、「論理的意味における述語ではない」ということは、「属性を表わさない」ということである。では、「‘exist(s)’が属性を表わさない」と言うことによって、何が意味されているのか。たとえば、‘Socrates is wise.’という文において、語‘wise’ないし句‘is wise’は、属性を表わす。また、‘Tame tigers growl.’という文における‘growl’も、‘Rajah growls.’という文における‘growls’も属性を表わす。しかし、‘Tame tigers exist.’における‘exist’や、‘Socrates exists.’における‘exists’は属性を表さない、ということである。

この場合、‘is wise’や‘growl(s)’の用法と‘exist(s)’の用法との間に、どのような違いがあるのか。ムーアによれば⁶⁾、両者の違いの1つは、‘Tame tigers growl.’には、ある種の曖昧さ（両義性）があるが、‘Tame tigers exist.’にはないということである。すなわち、‘Tame tigers growl.’という文は、‘All tame tigers growl.’、‘Most tame tigers growl.’、‘Some tame tigers growl.’のいずれも意味することができる。そして、これら3つの文によって表現される命題が真となるための条件として、少なくとも1匹以上の虎が実際に唸る（growl）ことが必要である。これに対して、‘Tame tigers exist.’には、このような曖昧さはない。‘Tame tigers exist.’は、つねに‘Some tame tigers exist.’だけを意味する。‘Tame tigers exist.’と‘Some tame tigers exist.’とは、まったく同一の命題を表現する2つの異なった表現方法にすぎない。では、‘All tame tigers exist.’や‘Most tame tigers exist.’には意味がないのか？それらの文は、表面的に何らかの意味があるように見えても、じつは何の意味もない。このことがまさに、‘exist’の用法と‘growl’の用法との間にある重要な違いを示している。

このことを明らかにするために、ムーアは⁷⁾、‘Some tame tigers *don’t* growl.’と‘Some tame tigers *don’t* exist.’を比較し分析する。‘Some tame tigers *don’t* growl.’は、‘There are some tame tigers, which *don’t* growl.’と同じことを意味し、‘Some tame tigers *do* growl.’、すなわち‘There are some tame tigers, which *do* growl.’と同様、明解な意味を持っている。そして、明らかに、これら2つの否定と肯定の文（または命題）は同時に真となりうる。しかし、‘Some tame tigers *don’t* exist.’の場合、事情は異なる。‘Some tame tigers *do* exist.’には明解な意味がある。それはまさに、‘There are some tame tigers.’を意味する。しかし、‘Some tame tigers *don’t* exist.’は奇妙な表現である。そもそも、その文に意味があるのか？もし意味があるなら、それは‘There are some tame tigers, which *don’t* exist.’を意味するはずであるが、このような文に意味があるのか？もし、‘Some tame tigers *don’t* exist.’という文において、‘exist’という語が、‘Some tame tigers *do* exist.’の場合と同じ意味で用いられている（そうでなければならぬ）なら、‘Some tame tigers *don’t* exist.’は、まったくのナンセンスである。

同様に、ムーアによれば⁸⁾、‘All tame tigers exist.’や‘Most tame tigers exist.’もまた、何の意味もない。そもそも、‘All tame tigers growl.’は、‘Some tame tigers growl, *and* there is no tame tiger which does not growl.’という連言（conjunction）と同値であり、そして、

これが意味を持つのは、‘There is at least one tame tiger which *does not growl.*’が意味を持つからである。それゆえ、もし‘There is at least one tame tiger which *does not exist.*’に意味がなければ、‘All tame tigers exist.’にも当然、意味がないはずである。なぜなら、‘There is a tame tiger which *does not exist.*’に意味がないなら、‘There is no tame tiger which *does not exist.*’、つまり‘All tame tigers exist.’にも意味がないだろうからである。同様に、‘Most tame tigers growl.’は、‘Some tame tigers growl, and the number of those (if any) which do not growl is smaller than that of those which do.’という連言と同値である。この陳述が意味を持つのは、‘There are tame tigers which *don’t growl.*’が意味をもつからである。それゆえ、もし‘There are tame tigers which *don’t exist.*’が意味を持たないなら、‘Most tame tigers exist.’もまた意味を持たないということが帰結する。

それゆえ、‘Some tame tigers growl.’における‘growl’の用法と、‘Some tame tigers exist.’における‘exist’の用法の重要な違いは、前者の場合、‘growl’の意味を変えずに有意味な否定文(‘Some tame tigers don’t growl.’)が得られるのに対して、後者の場合、‘exist’の意味を変えずに否定すると無意味な文(‘Some tame tigers don’t exist.’)しか得られないということである。これは、一般に、否定の存在命題(negative existential propositions)が陥るとされる矛盾(paradox)の一つである。‘Some tame tigers don’t exist.’の文が無意味なのは、‘There are tame tigers which don’t exist.’が意味を持たないからであるが、それは結局のところ、‘Some tame tigers which exist don’t exist.’という矛盾を帰結するからである。この矛盾は、本稿冒頭の例文(3) There are no dragons. (Dragons don’t exist.)においても生じる。この場合、‘there are no …’や‘don’t exist’が、もし論理的な述語であるなら、つまり主語の属性を表すなら、dragonsはそのような属性を担うことのできる基体として存在していなければならないことになる。一般に、否定の存在命題において、‘do(es) not exist’が述語される場合、その主語はwhat *do(es) exist*でなければならないという矛盾に陥る。すなわち、Dragons don’t exist. は、Dragons which exist *don’t exist.* という矛盾に陥るのである。

例文(2) Socrates is not. (Socrates doesn’t exist.)のような、単称(すなわち个体指示)の存在命題の否定においても、事情は同じである。もちろん、Socratesの死後も、‘He was wise.’や‘He was a philosopher.’のような、生前の彼について今なお当てはまる述定(predication)がある。これらは、‘He had the property of *being wise* (or *being a philosopher*)’を表す有意味な文である。しかし、‘does not exist’がSocratesに当てはまるのは、彼の死後だけである。つまり、‘Socrates doesn’t exist.’が真となるのは、Socratesが存在しない時である。したがって、‘dragons’や‘Socrates’についても、‘some tame tigers’の場合と同様、矛盾が生じる。すなわち、‘Some tame tigers don’t exist.’が、‘There are tame tigers which don’t exist.’という矛盾を帰結したように、‘Dragons don’t exist.’から‘There are dragons which don’t exist.’という矛盾が帰結し、‘Socrates doesn’t exist.’から‘There is such a person as Socrates

who doesn't exist.' という矛盾が帰結するように思われる。否定の存在文に見られるこの 'There is something which doesn't exist.' というタイプの矛盾を避けるために、そもそも 'exist(s)' を述語とみなすべきではない、すなわち、「存在は述語ではない (Existence is not a predicate.)」という考え方が、20 世紀において趨勢となった。この考え方に大きな影響を与えたのはフレーゲ (G. Frege) である。

II. フレーゲ：存在は個体の属性ではなく、概念の属性である

フレーゲは、『算術の基礎 (Die Grundlagen der Arithmetik)』において、存在は個体の属性ではなく概念の属性であるという説を提示する。彼はまず (同書第 51 節)⁹⁾、一般的概念語 (ein allgemeines Begriffswort/a general concept-word) と固有名 (Eigennamen/proper name) とを区別する。概念に関して問われるのは、何かがあるのか (unter ihn falle/fall under it) かどうか、そしてもしあるなら、いくつあるのかということである。ただ 1 つの物だけを表示する固有名に関しては、このような問いは無意味である。

フレーゲはつぎに (同書第 52 節)¹⁰⁾、数の表現についての言語上の混乱を指摘する。たとえば、「4 頭の純血種の馬 (vier edle Rosse/four thoroughbred horses)」という表現において、「純血種の (edel/thoroughbred)」は、概念〈馬 (Ross/horse)〉を限定する。それと同じように、数詞「4 頭の (vier/four)」は、概念〈純血種の馬 (edel Ross/thoroughbred horse)〉を限定するのだろうか。たしかに、そのような見かけを呼び起こす。しかしながら、概念〈4 頭の純血種の馬〉を構成する徴表 (Merkmale/characteristic) は、〈馬〉と〈純血種の〉だけであって、〈4 頭の〉は含まれない。たとえば、ある競馬に出走した 4 頭の純血種の馬がいたとして、各馬は〈純血種の〉という属性はもっているが、各馬が〈4 頭の〉という属性をもっているなどと考えることはナンセンスである。「4 頭の (vier/four)」という語によって我々が語っているのは、個体についてではなく、概念について (von einem Begriffe/of a concept) だけである。つまり、この競馬においては、概念〈純血種の馬〉の傘下に馬の個体が 4 頭いることを表しているのである。その意味で、この場合、数 4 (vier/four) は、個体の属性ではなく、概念〈純血種の馬〉の属性である。

フレーゲはさらに (同書第 53 節)¹¹⁾、概念の徴表と概念の属性とを区別する。ある概念を構成する徴表 (Merkmale/characteristic)」、たとえば、概念〈純血種の馬〉を構成する徴表₁〈純血種の〉と徴表₂〈馬〉は、その概念の傘下にある対象、つまり個的な馬、のもっている属性 (Eigenschaft/property) であって、〈純血種の馬〉という概念それ自体がもっている属性ではない。たとえば、〈直角三角形 (rechtwinkliges Dreieck/rectangular triangle)〉という概念は、〈直角の (rechtwinklig/rectangular)〉と〈三角形 (Dreieck/triangle)〉という徴表によって構成されているが、〈直角三角形〉という概念それ自体が〈直角の〉という属性を持っているわ

けではない。しかし、「直角正三角形は存在しない (*es kein rechtwinkliges, geradliniges, gleichseitiges Dreieck gebe/there is no rectangular, straight-line, equilateral, triangle*)」という文は、「直角正三角形」という概念それ自体について語っており、「…は存在しない (*es kein … gebe/there is no …*)」という表現は、この概念に〈数ゼロ (Nullzahl/nought)〉という属性を与えている。つまり、〈ゼロ […が存在しないこと]〉は、この概念それ自体の属性なのである。ところで、存在を肯定することは数ゼロを否定することに他ならない。フレーゲによれば、この点で「存在は数に似ている (*hat die Existenz Aehnlichkeit mit der Zahl./existence has similarity to number.*)」¹²⁾。したがって、〈数〉と同様、〈存在〉はある概念の属性であり (*Existenz Eigenschaft des Begriffes ist/existence is a property of the concept*)、その概念の傘下にある対象の属性ではない。では、概念の属性とはどういうことか。

フレーゲは¹³⁾、〈存在〉や〈数〉は、第1階の概念 (*Begriff der erster Stufe/the first-level concept*) の属性であり、第1階の概念を傘下におく第2階の概念 (*Begriff der zweiter Stufe/the second-level concept*) の徴表であると主張する。〈存在〉や〈数〉は、〈純血種の馬〉のように個体の属性を表す (すなわち第1階の) 概念ではない。しかし、だからといって、〈存在〉や〈数〉がまったく概念の徴表でないと考えるべきではない。〈存在〉や〈数〉を徴表とする概念は、ふつうイメージされる (第1階の) 概念とは違っているというだけである。例えば、その傘下にただ1個の対象 (個体) しかない第1階の概念をすべて集めて、それらを〈一性 (*Einzigkeit/oneness*)〉という高次 (第2階) の概念の傘下におくとする。たとえば、〈地球の衛星 (*Begleiter der Erde/satellite of the earth*)〉という概念は、その傘下にただ1個の対象しかないという属性をもった第1階概念であり、〈一性〉という属性をもっている。逆に言うと、このような第1階概念をその傘下に集めた (上位の) 第2階概念の徴表は〈一性〉である。この第2階概念の傘下には、当然ながら、〈地球の衛星〉という第1階概念はあるが、対象 (個体) としての月はない。このように、数1は、概念の概念、つまり第2階概念なのである。さらに、その傘下に1個以上の対象 (個体) が属する第1階の概念をすべて集めて、それら第1階概念を (上位の) 第2階概念の下におくとする。この場合、集められた第1階概念の傘下には必ず1個以上の対象 (個体) が属するので、それらの第1階概念は共通して〈(対象の) 存在〉という属性を持っている。つまり、〈存在〉がそれら第1階概念の属性である。そして、そのような第1階概念を傘下におく (上位の) 第2階概念の徴表こそが、まさに〈存在〉なのである。以上のように、〈存在〉や〈数〉は、第1階概念を傘下におく第2階概念の徴表であり、傘下におかれた第1階概念が属性としてもっているのが〈存在〉や〈数〉なのである。

Ⅲ. フレーゲ：「レオ・ザクセが存在する」は自明である

以上のように、フレーゲは、〈存在〉は個体の属性ではなく概念の属性であるという説を提示

した。これによって、たとえば「4頭の純血種の馬が存在する（Es gibt vier edle Rosse./There are four thoroughbred horses./Four thoroughbred horses exist.）」のような、概念語を主語とする一般存在命題（general existential propositions）の性格が明らかとなった。では、固有名や個体を指示する（定冠詞や指示代名詞を伴った）表現を主語とする単称存在命題（singular existential propositions）について、フレーゲはどのように分析するのか？彼は、『存在に関するピュンヤーとの対話』¹⁴⁾の中で、「レオ・ザクセが存在する（‘Leo Sachse existiert’）」は、個体レオ・ザクセについてではなく、語‘Leo Sachse’についての命題であると主張する。フレーゲはまず、「或る人間はドイツ人である（Einige Menschen sind Deutsche./Some men are German.）」は、「ドイツ人たる人間がいる（Es gibt deutsche Menschen./There are German men.）」と同意であることを確認した上で、「ザクセは人間である（Sachse ist ein Mensch./Sachse is a man.）」と「ザクセはドイツ人である（Sachse ist ein Deutscher./Sachse is a German.）」から、「或る人間はドイツ人である（Einige Menschen sind Deutsche./Some men are German.）」や「ドイツ人たる人間がいる（Es gibt Deutsche Menschen./There are German men.）」が論理的に導き出せるように、命題「ザクセは人間である（Sachse ist ein Mensch./Sachse is a man.）」から「人間がいる（Es gibt Menschen./There is a man.）」が出てくると主張する。

これに対して、論敵ピュンヤーはまず¹⁵⁾、フレーゲの前提を否定する。すなわち、「或る人間はドイツ人である（Einige Menschen sind Deutsche./Some men are German.）」は、「ドイツ人たる人間がいる（Es gibt deutsche Menschen./There are German men.）」と同意ではないとし、その上で、命題「ザクセは人間である（Sachse ist ein Mensch./Sachse is a man.）」から「人間が存在する（Es gibt Menschen./There is a man.）」を導き出すためには、「ザクセが存在する（Sachse existiert./Sachse exists.）」という命題が必要である、とする。

このピュンヤーの主張に対する反論において、フレーゲは「レオ・ザクセが存在する（‘Leo Sachse existiert’）」は、個体レオ・ザクセについてではなく、語‘Leo Sachse’についての命題であることを主張する¹⁶⁾。まず、ピュンヤーの条件「ザクセが存在する（Sachse existiert./Sachse exists.）」が必要であるというのは、その文が「語‘Sachse’は空虚な音ではなく、何かを指示する」という意味においてのみ正しい。しかし、これは自明な前提（selbstverständliche Voraussetzung/selfevident premiss）である。使用される語が空虚ではないこと、命題は判断の表現であること、人はたんに語と戯れているのではないことは、つねに論理的前提である。したがって、フレーゲによれば、ピュンヤーの条件は冗長（überflüssig/superfluous）である。

IV. フレーゲ：「存在する（‘ist’/‘existiert’）」に内容はない

さらにフレーゲは、『ピュンヤーとの対話』後記において、「『存在する』に内容はない」

と主張する¹⁷⁾。命題‘Leo Sachse ist’が自明なら、その‘ist’には、命題‘Es gibt Menschen/There are men’における‘es gibt/there are’のような内容 (Inhalt) はない。後者 [‘Es gibt Menschen/There are men’] は、「人間が存在する (Menschen existieren./Men exist.)」または「或る人間が有の傘下にある (Unter dem Seienden ist Einiges Mensch./Under the being is some man.)」とも表現され、その陳述内容は‘existieren/exist’や‘Seiend/being’などの中にはない。そうではなく、特称判断の形式 (der Form des partikulären Urteils/the form of the particular judgements) の中にある¹⁸⁾。特称判断「或る… (Einige …/Some …)」はすべて、‘es gibt/there is’の形式に変換されうる存在判断 (Existentialurteil/existential judgement) である。たとえば、「或る物体は軽い (Einige Körper sind leicht./Some bodies are light.)」は「軽い物体が存在する (Es gibt leichte Körper./There are light bodies.)」と同じである。

これと逆の変換、すなわち、たとえば命題「人間が存在する (‘Es gibt Menschen/There are men’)」を特称判断の形式 (Einige …/Some …) に変換するのは難しい¹⁹⁾。かりに、〈人間〉 = 〈理性的生物 (Mensch = vernünftiges lebendes Wesen/man = rational living entity)〉と定義するなら、「人間が存在する (‘Es gibt Menschen/There are men.’)」は、「或る生物は理性的である (Einige lebende Wesen sind vernünftig./Some living entities are rational.)」と言い換えることができる。これは、上で「或る物体は軽い (Einige Körper sind leicht./Some bodies are light.)」を「軽い物体が存在する (Es gibt leichte Körper./There are light bodies.)」と言い換えたのと逆の変換である。この逆の手続きが適用可能となるためには、「…が存在する」の主語となる概念、たとえば〈人間〉が、二つの徴表〈生物〉と〈理性的〉に分解可能でなければならない。そして、この場合、分解された概念の1つ〈生物〉は、当の概念〈人間〉を傘下におく上位の類的な概念で、分解されたもう1つの概念〈理性的〉は、その類的な概念を限定する種差でなければならない。しかし、すべての概念がこのように定義 (類的概念+種差) による概念分解を許すわけではない。このような分解を一般化するためには、すべての概念の上位にある一般的な概念を見つけなければならない²⁰⁾。そのような概念は、もはやいかなる内容ももたない。なぜなら、すべての概念の上位にある概念 (それを概念と呼べるなら) は、いかなる限定もないはずだからである。そのような無内容な最上位の一般的な概念として考えられるのは、〈自己同一 (Sich selbst gleichen/identical with oneself)〉であろう。この一般的な概念を用いて、‘Es gibt Menschen/There are men’における‘Menschen/men’を変換すると、「自己同一な人間が存在する (Es gibt sich selbst gleiche Menschen/There are men identical with themselves)」となり、これは「或る人間は自己同一である (Einige Menschen sind sich selbst gleich/Some men are identical with themselves)」ないし「或る自己同一なものは人間である (Einige sich selbst gleiche ist Mensch/Something identical with itself is man)」と変換できることになる

フレーゲによると²¹⁾、この最上位にある一般的な概念を表すために、自然言語は「有 (Seiend/

being)」という無内容な疑似概念（Quasibegriff “Seiendes” ohne Inhalt/quasi-concept ‘being’ without content）を形成した。こうして、〈人間〉＝〈有る人間（seiende Menschen/being men）〉と定義し、「人間が存在する（‘Es gibt Menschen/There are men’）」は、「或る人間は有る（Einige Menschen sind/Some men are）」や「或る有は人間である（Einiges Seiende ist Mensch/Some being is a man）」へと変換することができるようになる。そして、この陳述の内容は、語「有（Seiend/being）」の中にはなく、特称判断の形式「或る…（Einiges …/Some …）」の中にある。語「有（Seiend/being）」は、特称判断の形式へと変換するための言語上の方便にすぎない。哲学者たちが〈絶対的有（absolute Sein/absolute Being）〉について語るとき、これはじつはコブラの偶像化（Vergötterung der Kopula/idolization of copula）にすぎないのである。

フレーゲによれば²²⁾、この最上位の疑似概念〈有〉に内容を与えると、矛盾が生じる。もし、‘sein/be’に内容を与え、命題‘A ist/A is’が冗長でも自明でもないと考えたと、その命題の否定‘A ist nicht/A is not’における‘ist nicht/is not’が内容を持っていることを認めざるを得なくなる。〈ない（ist nicht/is not）〉という内容（属性）を担う基体がある、すなわち〈非存在〉が帰属されるべき基体が存在する（es Subjekte gibt, denen das Sein abgesprochen werden muss/There is a subject which being must be denied）ということ認めざるを得なくなる。こうして、「或る有は非有という概念の傘下にある（Einige Seiende fällt unter den Begriff des Nichtseienden/Some being falls under the concept of non-being）」や「或る有はない（Einige Seiende ist nicht/Some being is not）」という矛盾に陥らざるをえなくなる。それゆえ、背理法によって、最初の仮定が否定されなければならない。すなわち、概念〈有（Seiend/being）〉や語「存在する（existieren/exist）」に内容はない。

以上まとめると、「或る人間が存在する（Einige Menschen existieren./Some men exist.）」という文において、陳述内容は「存在する（existieren/exist）」という語の中にはなく、特称判断の形式（Einige …/Some …）の中にある。そして、「或る人間はドイツ人である（Einige Menschen sind Deutsche./Some men are German.）」もまた、「或る人間が存在する（Einige Menschen existieren./Some men exist.）」と同程度に、立派な存在判断（Existentialurteil/existential judgement）である。また、「存在する（existieren/exist）」という語は、すべての概念の上位概念として、自明な何か（たとえば、〈自己同一〉）を意味するので、「レオ・ザクセが存在する（Leo Sachse existiert/Leo Sachse exists）」という単称命題を表す文において、「存在する（existieren/exist）」は、個体ザクセについて何も陳述していない²³⁾。そして、「…が存在する（es gibt …/There is …）」によって表現される〈存在（Existenz/existence）〉という概念は、まさにそのような上位概念の徴表であって、第1階概念の徴表（それは、その傘下にある個体の属性を表す）ではありえないのである。「人間が存在する（Es gibt Menschen./There are men.）」という文は、〈人間〉という概念の傘下にある個体について語られているよ

うに見えるが、じつは〈人間〉という概念しか問題になっていない。したがって、「存在する (existieren/exist)」という語の内容を第1階概念の徴表とみなし、その第1階概念の傘下にある個体もっている属性とみなすのは適切ではない²⁴⁾。

V. フレーゲ「存在は個体ではなく、概念の属性である」(本稿Ⅱ) に対して

以上見たようにフレーゲは、概念語(概念を表す)と固有名(個体を指示する)を区別した上で、〈存在〉や〈数〉は概念の属性であって、個体の属性ではないとした。たとえば、〈直角三角形〉という概念を構成する徴表は〈直角の〉と〈三角形〉であるが、〈直角三角形〉という概念それ自体が〈直角の〉や〈三角形〉という属性を持っているわけではない。そのような属性をもっているのは、この概念の傘下にある個体(個々の図形)である。しかし、「直角正三角形は存在しない (*es kein rechtwinkliges, geradliniges, gleichseitiges Dreieck gebe/there is no rectangular, straight-line, equilateral, triangle*)」という文における、「…は存在しない (*es kein … gebe/there is no …*)」という表現は、この概念に〈数ゼロ〉という属性を与えている。すなわち、その文は、直角正三角形という存在しない個体についてではなく、〈直角正三角形〉という概念それ自体について、その概念には具体例(instance)が1つもない、その概念を例化(instantiation)する個体は1つもないと語っている。〈数ゼロ […が存在しないこと]〉つまり〈非存在〉は、〈直角正三角形〉という概念それ自体の属性なのである。こうして、フレーゲは、存在の肯定は数ゼロの否定であるから、存在と数の類似性を主張する。

これに対して、我々の立場を記しておこう。今要約したフレーゲの存在(非存在)の解釈は、フレーゲ以後、述語論理のシステムにおいて、 $\neg \exists x (Tx \wedge Rx)$ ($Tx : x$ は正三角形である、 $Rx : x$ は直角を有する)と記号化されるタイプの存在の解釈、すなわち‘ \exists ’という存在量子(existential quantifier)が表すものとする解釈である。この解釈によれば、‘There are some tame tigers.’、‘Some tigers are tame.’、‘Some tame tigers exist.’は、すべて同じこと、つまり、 $\exists x (Tx \wedge Mx)$ ($Tx : x$ は虎である、 $Mx : x$ は飼い慣らされている)ということを行っている。また、‘There are four thoroughbred horses.’、‘Four horses are thoroughbred’、‘Four thoroughbred horses exist.’も、すべて同じこと、つまり、 $4x (Hx \wedge Tx)$ ($Hx : x$ は馬である、 $Tx : x$ は純血種である)である。この解釈においては、‘rectangular, straight-line, equilateral, triangle’、‘tame tigers’、‘thoroughbred horses’のような語は、図形や虎や馬の個体を指すのではなく、〈直角正三角形〉、〈純血種の馬〉、〈飼い慣らされた虎〉という概念(あるいはその概念の徴表)を表すために使用されている。概念語を主語とする一般存在命題(general existential propositions)に関するこのような解釈に異存はない。

Ⅵ. フレーゲ『『レオ・ザクセが存在する』は自明である』（本稿Ⅲ）に対して

フレーゲは、概念語を主語とする一般存在命題だけでなく、固有名を主語とする単称存在命題（singular existential propositions）についても、〈存在〉は主語の固有名が指す個体の属性ではありえないことを主張する。上述のように、フレーゲの論敵ピュンヤーは、命題「ザクセは人間である（Sachse ist ein Mensch./Sachse is a man.）」から命題「人間が存在する（Es gibt Menschen./There is a man.）」を導き出すためには、命題「ザクセが存在する（Sachse existiert./Sachse exists.）」も必要であると主張するのに対して、フレーゲによれば、命題「ザクセが存在する」は、命題「ザクセは人間である」の自明な前提であり、余分（überflüssig/superfluous）である。両者の違いは、結局、「存在する」の機能に関する理解の違いから来ると思われる。ピュンヤーは、「存在する」が個体の何らかの属性を表すと見なしており、彼にとっては、「人間が存在する」を導出するためには、「ザクセは人間である」に「ザクセが存在する」が付け加わる必要があった。しかし、フレーゲにとっては、「人間が存在する」は個々の人間にとっての命題ではなく、「 x は人間である」の x に当てはまる対象が1つ以上あること、すなわち、 $\exists xHx$ （ Hx ： x は人間である）を意味するから、「ザクセは人間である」が与えられれば十分であった。この論理的導出に関する限り、フレーゲの主張に何の異存もない。

しかし、ここで、「レオ・ザクセが存在する（‘Leo Sachse existiert/exists’）」は、個体レオ・ザクセについてではなく、語‘Leo Sachse’についての命題であり、その文は語‘Leo Sachse’は空虚な音ではなく、何かを指示することを意味するというフレーゲの主張には、大いに異存がある。この主張は、指示の矛盾を避けるために時々用いられる。指示の矛盾とは、‘Leo Sachse does not exist’のような存在の否定文において、これがもし個体レオ・ザクセについての命題なら、‘does not exist’が述語されるべき主語‘Leo Sachse’の指示する対象が、そもそも存在していないことになるので、‘Leo Sachse does not exist’はナンセンスであるという矛盾である。ギーチも言うように²⁵⁾、これは明らかに、名前の指示（reference）と名前の持ち主（bearer）の混同である。‘Leo Sachse exists (does not exist).’が真となるために必要なのは、語‘Leo Sachse’は「指示を持っている（have a reference）」ということであり、その語が指示を持つために必要なのは、‘Leo Sachse exists now’ではなく、‘Leo Sachse exists or has existed’ということだけである。

ギーチは、3つのタイプの存在文（命題）を区別した²⁶⁾。すなわち、

- (A) There is no such thing as Cerberus; Cerberus does not exist (is not real).
- (B) There is no such thing as a dragon; dragons do not exist.
- (C) Joseph is not and Simeon is not.

このうち、(A)はCerberus（地獄の番犬で、頭が3つで尾は蛇）という個体について、‘does not exist’ということ語っているのではなく、神話を恐れる子供に、‘Cerberus’という語に

ついて、その語は対象を指示する固有名として使われているように見えるが実はそうではない、ということ語っている。すなわち、(A)は語の用法についての陳述である。(B)は、フレーゲの言う概念語を主語とする存在命題であるから、主語‘Dragons’は、存在しないドラゴンという個体を指すのではなく、〈dragon〉という概念(翼と鍵爪と牙をもち炎や毒の息を吐く竜)を表し、そのような概念について、それを例化する個体は1つもない、つまり $\neg \exists x Dx$ (Dx : x はドラゴンである)ということ語っている。

このように、(A)や(B)の命題において、動詞‘exist’や‘be’は、論理的には主語の表す対象について何かを語っているのではなく、したがって、それらの動詞は論理的な述語ではない。しかし、だからといって、(C)命題も同じように解釈する必要はない。聖書から引かれた²⁷⁾(C)命題において、ヤコブは息子のヨセフやシメオンについて何も語っておらず、たんに‘Joseph’や‘Simeon’という語の用法について語っている、などと解釈することはまったくのナンセンスである。(C)命題の‘is not’は、明らかに個体ヨセフや個体シメオンについて語られている。父親ヤコブがその安否を心配して彼らの生存について語っている。この(C)命題のような‘exist’や‘be’を、(B)命題のような「X [概念語] なるものが存在する(‘there is’ an X)」という意味の‘exist’や‘be’と区別して、ギーチは「現在-現実性意味(the present-actuality sense)」と呼んだ²⁸⁾。それは、「ある個体が存在し始める(came to exist)、依然として存在している(still exists)、もはや存在しない(no longer exists)と語られる場合の‘exist’の意味である²⁹⁾。ヴァイデマンによれば³⁰⁾、(C)のような命題は、ある特定の時間(t_1)における、ある特定の個体(a)の現実的存在(非存在)を主張する命題、すなわち Et_1a ($\neg Et_1a$)である。

ギーチの言うように、この(C)のような命題における‘exist’や‘be’は、「確かに個体についての純正の述語(certainly a genuine predicate of individuals)」³¹⁾であると思われる。

注

- 1) 本稿は2016年度関西大学研修員として行った研究成果の一部である。ここに記して謝意を表す。
- 2) cf. Aichson, J. 1992, *Linguistics*, 4th ed., Teach Yourself Book: London, pp.88-89: The meaning of sentences. So far, we have dealt only with the meaning of words. But what about sentences? ... After a sentence has been ‘unpacked’ into its underlying meaning, most linguists assume that semantic representations should be expressed in some type of formal logic.
- 3) cf. Kneale & Moore, 1936. この論争の詳細について、加藤(2009)を参照。
- 4) cf. Kneale & Moore, 1936, pp.176-7.
- 5) *Ibid.*
- 6) *Op. cit.*, pp.180-1.
- 7) *Ibid.*
- 8) *Ibid.*
- 9) Frege, 1884a, SS.63-64: Zunächst ist es unpassend, ein allgemeines Begriffswort Namen eines

Dinges zu nennen. Dadurch entsteht der Schein als ob die Zahl Eigenschaft eines Dinges wäre. Ein allgemeines Begriffswort bezeichnet eben einen Begriff. Nur mit dem bestimmten Artikel oder einem Demonstrativpronomen gilt es als Eigenname eines Dinges, hört aber damit auf, als Begriffswort zu gelten. Der Name eines Dinges ist ein Eigenname. ... ein Begriff dadurch nicht aufhört, Begriff zu sein, dass nur ein einziges Ding unter ihn fällt, welches demnach völlig durch ihn bestimmt ist. Einem solchen Begriffe (z.B. Begleiter der Erde) kommt eben die Zahl 1 zu, die in demselben Sinne Zahl ist wie 2 und 3. Bei einem Begriffe fragt es sich immer, ob etwas und was etwa unter ihn falle. Bei einem Eigennamen sind solche Fragen sinnlos.

- 10) *Op. cit.*, S.64: Der Ausdruck "vier edle Rosse" erweckt den Schein, als ob "vier" den Begriff "edles Ross" ebenso wie "edel" den Begriff "Ross" näher bestimme. Jedoch ist nur "edel" ein solches Merkmal; durch das Wort "vier" sagen wir etwas von einem Begriffe aus.
- 11) *Op.cit.*, S.64: Unter Eigenschaften, die von einem Begriffe ausgesagt werden, verstehe ich natürlich nicht die Merkmale, die den Begriff zusammensetzen. Diese sind Eigenschaften der Dinge, die unter den Begriff fallen, nicht des Begriffes. So ist "rechtwinklig" nicht eine Eigenschaft des Begriffes "rechtwinkliges Dreieck"; aber der Satz, dass es kein rechtwinkliges, geradliniges, gleichseitiges Dreieck gebe, spricht eine Eigenschaft des Begriffes "rechtwinkliges, geradliniges, gleichseitiges Dreieck" aus; diesem wird die Nullzahl beigelegt.
- 12) *Op. cit.*, S.65: In dieser Beziehung hat die Existenz Aehnlichkeit mit der Zahl. Es ist ja Bejahung der Existenz nichts Anderes als Verneinung der Nullzahl. Weil Existenz Eigenschaft des Begriffes ist, erreicht der ontologische Beweis von der Existenz Gottes sein Ziel nicht. Ebenso wenig wie die Existenz ist aber die Einzigkeit Merkmal des Begriffes "Gott".
- 13) *Op. cit.*, S.65: Es wäre auch falsch zu leugnen, dass Existenz und Einzigkeit jemals Merkmale von Begriffen sein könnten. Sie sind nur nicht Merkmale der Begriffe, denen man sie der Sprache folgend zuschreiben möchte. Wenn man z.B. alle Begriffe, unter welche nur Ein Gegenstand fällt, unter einen Begriff sammelt, so ist die Einzigkeit Merkmale dieses Begriffes. Unter ihn würde z.B. der Begriff "Erdmond", aber nicht der sogenannte Himmelskörper fallen. So kann man einen Begriff unter einen höhern, so zu sagen einen Begriff zweiter Ordnung fallen lassen. Cf. 後にフレーゲは、「第2次の概念（Begriff zweiter Ordnung）」の代わりに、「第2階の概念（Begriff der zweiten Stufe）」という言い回しを好んで用いるようになった。（三平ほか訳註、113頁）。
- 14) Frege, 1884b, S.66, [97.] F. "Einige Menschen sind Deutsche" bedeutet dasselbe wie "Es gibt deutsche Menschen". Aus dem Satz: "Sachse ist ein Mensch" folgt ebenso "Es gibt Menschen" wie aus den Sätzen "Sachse ist ein Mensch", "Sachse ist ein Deutscher" folgt: "Einige Menschen sind Deutsche" oder "Es gibt deutsche Menschen".
- 15) *Op. cit.*, S.66, [98.] P. "Einige Menschen sind Deutsche" bedeutet nicht dasselbe wie "Es gibt deutsche Menschen". Sie dürfen aus dem Satze "Sachse ist ein Mensch" allein nicht schliessen "Es gibt Menschen", sondern Sie bedürfen dazu noch des Satzes: "Sache existiert".
- 16) *Op. cit.*, S.67, [99.] F. Hierauf würde ich sagen: Wenn "Sache existiert" heissen soll "Das Wort 'Sachse' ist nicht ein leerer Schall, sondern bezeichnet etwas", so ist es richtig, dass die Bedingung "Sache existiert" erfüllt sein muss. Dies ist aber keine neue Prämisse, sondern die selbstverständliche Voraussetzung bei allen unseren Worten. Die Regeln der Logik setzen immer voraus, dass

die gebrauchten Worte nicht leer sind, dass die Sätze Ausdrücke von Urteilen sind, dass man nicht mit blossen Worten spiele. Sobald “Sachse ist ein Mensch” ein wirkliches Urteil ist, muss das Wort “Sachse” etwas bezeichnen und dann gebrauche ich eine weitere Prämisse nicht, um daraus zu schliessen, “Es gibt Menschen”. Die Prämisse “Sache existiert” ist überflüssig, wenn sie etwas anderes bedeuten soll, als jene selbstverständliche Voraussetzung bei allem unserem Denken.

- 17) *Op. cit.*, 『ピュンヤーとの対話』後記, S.69: Wenn aber der Satz “Leo Sachse ist” selbstverständlich ist, so kann in dem “ist” nicht derselbe Inhalt liegen wie in dem “es gibt” des Satzes “Es gibt Menschen”, denn dieser sagt nicht etwas Selbstverständliches. Wenn Sie nun den Satz “Es gibt Menschen” auch ausdrücken “Menschen existieren” oder “Unter dem Seienden ist Einiges Mensch”, so kann der Inhalt der Aussage nicht in dem “existieren” oder “Seienden” u.s.w. liegen.
- 18) *Op. cit.*, S.70: Wenn aber der Inhalt der Aussage des Urteils “Menschen existieren” nicht in dem “existieren” liegt, wo liegt er dann? Ich antworte: in der Form des partikulären Urteils. Jedes partikulären Urteil ist ein Existentialurteil, das in die Form mit “es gibt” umgesetzt werden kann. z.B. “Einige Körper sind leicht” ist dasselbe wie “Es gibt leichte Körper”. “Einige Vögel können nicht fliegen” ist dasselbe wie “Es gibt Vögel, die nicht fliegen können” u.s.w. Schwieriger ist es, umgekehrt ein Urteil mit “es gibt” in ein partikuläres umzusetzen.
- 19) *Op. cit.*, SS.70-71: Schwieriger wird es, wenn man den Satz “Es gibt Menschen” in die Form eines partikulären Urteils bringen will. Wenn man definiert Mensch = vernünftiges lebendes Wesen, so kann man sagen: “Einige lebende Wesen sind vernünftig”, und dies ist unter Voraussetzung der Richtigkeit der Definition gleichbedeutend mit “Es gibt Menschen”. Die Anwendbarkeit dieses Verfahrens setzt voraus, dass man den Begriff in zwei Merkmale zerlegen könne.
- 20) *Op. cit.*, S.71: Wenn man die Sache ganz allgemein machen will, muss man einen Begriff aufsuchen, der allen Begriffen übergeordnet ist. Ein solcher Begriff, wenn man er so nennen will, kann gar keinen Inhalt mehr haben, indem sein Umfang grenzenlos wird; denn jeder Inhalt kann nur in einer gewissen Beschränkung des Umfangs bestehen. Als solchen Begriff könnte man den des “Sich selbst gleichen” wählen, indem man sagte “Es gibt Menschen” ist dasselbe wie “Es gibt sich selbst gleiche Menschen” ist dasselbe wie “Einige Menschen sind sich selbst gleich” oder “Einige sich selbst gleiche ist Mensch”.
- 21) *Op. cit.*, S.71: Die Sprache hat sich anders geholfen. Zur Bildung eines Begriffes ohne Inhalt eignete sich vorzüglich die Kopula, d.i. die blosse Form der Aussage ohne Inhalt. In dem Satz “Der Himmel ist blau” ist die Aussage “ist blau”, der eigentliche Inhalt der Aussage liegt aber in dem Worte “blau”. Wenn man dies weglässt, so erhält man eine Aussage ohne Inhalt: “Der Himmel ist” übrig. So bildet man einen Quasibegriff “Seiendes” ohne Inhalt [, da] von unendlichem Umfang. Man kann nun so sagen: Menschen = seiende Menschen; “Es gibt Menschen” ist dasselbe wie “Einige Menschen sind” oder “Einiges Seiende ist Mensch”. Es liegt also hier der eigentliche Inhalt der Aussage nicht in dem Worte “Seiend”, sondern in der Form des partikulären Urteils. Das Wort “Seiend” ist nur eine Verlegenheitsschöpfung der Sprache, um die Form des partikulären Urteils zur Anwendung bringen zu können. Wenn die Philosophen von dem “absoluten Sein” sprechen, so ist dies eigentlich eine Vergötterung der Kopula.

- 22) *Op. cit.*, S.73: Wenn man dem Worte “Sein” einen Inhalt geben will, so, dass der Satz “A ist” nicht überflüssig und selbstverständlich ist, wird man dazu genötigt, zuzugeben, dass die Verneinung des Satzes “A ist” unter Umständen möglich ist; d.h. dass es Subjekte gibt, denen das Sein abgesprochen werden muss. Dann aber ist der Begriff des “Seins” nicht mehr allgemein geeignet, zur Erklärung des “es gibt” zu dienen in der Weise, dass “es gibt B’s” gleichbedeutend ist mit “einige Seiende fällt unter den Begriff B”; denn wenden wir diese Erklärung an auf den Satz “es Subjekte gibt, denen das Sein abgesprochen werden muss”, so erhalten wir “Einige Seiende fällt unter den Begriff des Nichtseienden” oder “Einige Seiende ist nicht”. Darüber ist in keener Weise hinwegzukommen, sobald man dem Begriff des Seienden irgendwelchen Inhalt, sei es welchen es sei, geben will.
- 23) *Op. cit.*, S.74: Man kann sagen, dass die Bedeutungen des Wortes “existieren” in den Sätzen “Leo Sachse existiert” und “Einige Menschen existieren” keinen grössern Unterschied zeigen wie [die von] “Ein Deutscher sein” in den Sätzen “Leo Sachse ist ein Deutscher” und “Einige Menschen sind Deutsche”. Aber der Satz “Einige Menschen sind Deutsche” oder “Einiges Existierende ist Menschen” ist nur dann gleichbedeutend mit “Es gibt Menschen”, wenn der Begriff “Existierendes” dem Begriffe “Mensch” übergeordnet ist. Wenn also jene Ausdrucksweisen allgemein gleichbedeutend sein sollen, so muss der Begriff “Existierendes” jedem Begriffe übergeordnet sein. Dies ist nur dadurch möglich, dass das Wort “existieren” etwas vollkommen Selbstverständliches bedeutet, dass also in dem Satze “Leo Sachse existiert” gar nichts ausgesagt werde, und dass in dem Satze “Einige Menschen existieren” der Inhalt der Aussage nicht in dem Worte “existieren” liege. Die durch das Wort “es gibt” ausgedrückte Existenz ist nicht in dem Worte “existieren”, sondern in der Form des partikulären Urteils enthalten. “Einige Menschen sind Deutsche” ist ebenso gut ein Existentialurteil wie “Einige Menschen existieren”. Sobald man aber dem Worte “existieren” einen Inhalt gibt, der von einzeitigem ausgesagt wird, kann dieser Inhalt auch zum Merkmal eines Begriffes gemacht werden, unter den das einzelne fällt, von dem das existieren ausgesagt wird.
- 24) *Op. cit.*, S.74: Die durch “es gibt” ausgedrückte Existenz kann nicht Merkmal des Begriffes sein, dessen Eigenschaft sie ist, eben weil sie seine Eigenschaft ist. In dem Satze “Es gibt Menschen” scheint von Individuen gesprochen zu werden, die unter den Begriff “Menschen” fallen, während doch nur vom Begriffe “Mensch” die Rede ist. Der Inhalt des Wortes “existieren” kann nicht gut zum Merkmal eines Begriffes genommen werden, weil “existieren” keinen Inhalt hat, [so wie] es in dem Satze “Menschen existieren” gebraucht wird.
- 25) cf. Geach, 1969, p.47
- 26) cf. Geach, 1969, p.43
- 27) *Genesis*, 42: 36. King James version.
- 28) Anscombe & Geach, 1961, pp.90–91: We may express the difference between the two senses of ‘is’ as follows: An individual may be said to ‘be’, meaning that it is at present actually existing; on the other hand, when we say that ‘there is’ an X (where ‘X’ goes proxy for a general term), we are saying concerning a kind or description of things, Xs, that there is at least one thing of that kind or description. ... Frege was clear as to this distinction, though he rightly had no special interest, as a *mathematical* logical, in assertions of present actuality. It is a great misfor-

tune that Russell has dogmatically reiterated that the ‘there is’ sense of the ‘substantive’ verb ‘to be’ is the only one that logic can recognize as legitimate; for the other meaning –present actuality– is of enormous importance in philosophy, … It is the present-actuality sense of ‘est’ that is involved in Aquinas’s discussions of *ens* and *esse*. It corresponds to the uses of the verb ‘to exist’ in which we say that an individual thing comes to exist, continues to exist, ceases to exist, or again to the uses of ‘being’ in which we say that a thing is brought into being or kept in being by another thing.

29) cf. Geach, 1969, pp.46–7.

30) cf. Weidemann, 1979, S.59.

31) Geach, 1969, p.46: … a sense of ‘is’ or ‘exists’ that seems to me to be certainly a genuine predicate of individuals. cf. *op.cit.*, p.47: The fact that in A and B propositions the verb ‘exist’ or ‘be’ is not such a genuine predicate tells us nothing about C propositions. … So negative C propositions can raise no paradoxes of reference –and in showing this we had no need to deny that in them ‘is’ or ‘exists’ is a genuine predicate.

参考文献

- Aichson, J. 1992, *Linguistics*, 4th ed., Teach Yourself Book: London.
- Anscombe, G.E.M. & Geach, P.T., 1961, *Three Philosophers*, Oxford: Blackwell.
- Ashworth, E.J. 1973, “Existential Assumptions in Late Medieval Logic”, *American Philosophical Quarterly*, 10, pp.141–47
- Barnes, J. 1972, *The Ontological Argument*, London: St. Martin’s Press.
- Berto, F. 2013, *Existence as a Real Property: The Ontology of Meinongianism*, Springer: Dordrecht.
- Buermeyer, K. 1986, “The Verb and Existence”, *The New Scholasticism*, 60.
- Davies, B. 1997, “Aquinas, God, and Being”, *The Monist*, vol.80, no.4, pp.500–520.
- Dummett, M. 1981, *Frege, Philosophy of Language*, 2nd ed., London: Duckworth.
- Frege, G. 1884a, *Die Grundlagen der Arithmetik*, Breslau: Verlag von Wilhelm Köbner, [tr. by J.L.Austin, *The Foundations of Arithmetic*, Basil Blackwell: Oxford, 1978]; フレーゲ『算術の基礎』三平正明・土屋俊・野本和幸訳『フレーゲ著作集2 算術の基礎』所収、勁草書房、2001。
- Frege, G. 1884b, “Dialog mit Pünjer über Existenz”, vor (*Nachgelassene Schriften und Wissenschaftlicher Briefwechsel*, I, Felix Meiner: Hamburg, 1969): フレーゲ「存在に関するピュンジャーとの対話」中川大訳『フレーゲ著作集2 算術の基礎』所収、勁草書房、2001。
- Geach, P.T. 1969, “Form and Existence”, in *Aquinas: A collection of critical essays*, ed. by A. Kenny, London: Melbourne, pp.29–53 (& in P.T. Geach, *God and The Soul*, London: Routledge & Kegan Paul, 1969).
- Gilson, E. 1949, *Being and Some Philosophers*, Tronto: Pontifical Institute of Medieval Studies.
- Henry, D.P. 1972, *Medieval Logic and Metaphysics*, London.
- 加藤雅人、1998年、「トマス・アキナスにおける存在論的二区分—言語の観点から」、『哲学』日本哲学会、第49号、180–190頁。
- 加藤雅人、2003年、「トマス・アキナスにおけるエッセの意味論」、『哲学』日本哲学会、第54号、204–214頁。

- 加藤雅人、2009年、「存在は述語か？— W. Kneale と G.E. Moore の論争（1936）」、『哲学』関西大学哲学会、第27号、1-19頁。
- Kenny, A. 2002, *Aquinas on Being*, Oxford: Oxford Univ. Press.
- Klima, G. 1990, “On Being and Essence in St. Thomas Aquinas’s Metaphysics and Philosophy of Science”, *Knowledge and the Sciences in Medieval Philosophy: Proceedings of the Eighth International Congress of Medieval Philosophy*, ed. S. Knuutila, R. Työrinoja, and S. Ebbesen, vol. 2 series B19, Helsinki: Luther-Agricola Society, pp. 210-221
- Kneale, W. & Moore, G.E., 1936, SYMPOSIUM: “Is Existence a Predicate?”, *Proceedings of the Aristotelian Society*, Supplementary Volume 15, pp. 154-188 [W. Kneale, pp. 154-174 & G.E. Moore, pp. 175-188].
- McInerny, R. 1959, “Some Notes on Being and Predication”, *The Thomist*, 22, 1959, pp. 315-335. (repr. In *Being and Predication: Thomistic Interpretations*, The Catholic University Press, Washington D.C., 1986, c. 13, A, pp. 173-189).
- Miller, B. 1975, “In Defense of the Predicate ‘Exists,’” *Mind*, vol. 84, no. 335, pp. 338-354.
- Miller, B. 2002, *The Fullness of Being: A New Paradigm for Existence*, Indiana: Univ. of Notre Dame Press.
- Nijenhuis, J., 1986, “‘To Be’ or ‘To Exist’: That is the Question”, *The Thomist*, vol. 3, no. 3, pp. 353-394.
- Oppy, G. 1995, *Ontological Arguments and Belief in God*, Cambridge: Cambridge U.P.
- Pasnau, R. 1997, “Aquinas on Thought’s Linguistic Nature”, *The Monist*, 80.
- Quine, W.V. 1960, *Word and Object*, Cambridge: MIT Press.
- Quine, W.V. 1963, *From a Logical Point of View*, New York: Harper.
- Russell, B. 1919, *Introduction to Mathematical Philosophy*, London: N.Y., [Dover Publications, Inc.: N.Y., 1993]; ラッセル『數理哲學序説』平野智治譯岩波書店、1954 [弘文堂書房、1942]
- Veres, T. 1970, “Eine fundamentale ontologische Dichotomie im Denken des Thomas von Aquin”, *Philosophisches Jahrbuch*, 77, pp. 81-98.
- Weidemann, H., 1979, “‘Socrates est’/‘There is no such thing as Pegasus’ Zur Logik singularer Existenzaussagen nach Thomas von Aquin und W. Van Orman Quine”, *Philosophisches Jahrbuch*, 86, SS. 42-59.
- Weidemann, H. 1985, “The Logic of Being in Thomas Aquinas,” in Knuutila, S. & Hintikka, J. (eds.), *The Logic of Being*, Dordrecht: Reidel, pp. 181-200.
- Williams, C.J.F. 1981, *What Is Existence?*, Oxford: Oxford Univ. Press.